日向久遠誕生日記念SS

遊び人レベル世界３位

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日向久遠誕生日記念ＳＳ

【Ｎコード】
Ｎ８０１１Ｚ

【作者名】
遊び人レベル世界３位

【あらすじ】
メリークリスマース！　ということで本日はＷｉｔｈ　Ｒｉｂｂｏｎに登場する、主人公のお母さん、日向久遠さんの誕生日ですね～　しかしながら、内容は夏のお話になっておりますｗ　あらすじとしては、　翔太郎とはるかが久遠さんの秘密を探る、　といった内容になっております～

・・・
・・・
・・・
「や、ども。天作知之だよ。
前のＳＳはみなせの連載小説の中編だったらしいから登場を免れたけど、
今日は最初から最後まで書いてあるからっていう意味のわからない理由でひっぱりだされたよ。
まあいつも通りのこととはいえ、クリスマスまで呼ばれるなんて、勘弁願いたいよ。
なんか今日はＷｉｔｈ　Ｒｉｂｂｏｎに登場する、主人公の翔太郎の母親、日向久遠の誕生日なんだとさ。
それであの人が例によって書いたようだよ。
まあなんか同人誌も作ってたみたいだしね。
まあそれはボクには関係ないけど。
さてそれじゃあ前おきはこれくらいで。
今回も最後までごゆっくりお楽しみください」

８月のとある日。
俺はクーラーの効いた部屋で先日買った漫画を読んでいた。
「へぇ、まさかあいつが犯人だったとは・・・
あ、なるほどあそこのシーンはそういうことだったんだ」
漫画の内容に対して独り言をつぶやいていると、
ドアがノックされた。
「どうぞ～」
俺はそのノックに対して漫画を見ながら返答する。

するとドアが開いてノックした主が部屋に入ってきた。
「パパ～何してるの～？」
部屋に入ってきた美少女がそう訪ねてくる。
彼女の名前は日向はるか。
俺と対して変わらない年のこの少女は、
実は俺の娘だったりする。
なぜ普通の学生の俺に娘がいるのかというと、
彼女は未来からやってきたからである。
彼女に対して詳しい説明は省くが、
黒髪をツインテールにまとめた、
とてもかわいい女の子だ。
俺は今から親馬鹿になれる自信があるな。
そして俺は彼女の質問に答える。
「こないだ買ってきた漫画を読んでいるんだ。
なかなか面白いぞ」
「どんなお話なの？」
「推理物で、主人公が探偵というのはよくある設定なんだけど、
その主人公が少しだけ時間を操ることができる超能力が使えてな、
その超能力を使って事件を解決に導くっていう内容なんだ」
「へぇ～
あたしの超能力にとてもよく似てるね。
こんな偶然あるんだ～」
「俺も読んでて笑っちゃったよ。
適当に買った漫画なんだけど、
まさかそんな設定だとは思わなかった。
でも逆に言えば、はるかの超能力も、
こんな風に使うことができるって事だな」
「そうだね。
よしあたし探偵になろうかな。
タイムディティクティブ日向はるか！

どんな事件もパパっと解決！
みたいな？」
「そうだな」
「「アハハ」」
俺達は二人で笑った。
「ところでさ」
「うん？」
「あたし前から不思議だったのだけれど、
久遠さんって普段何をしているの？」
「ああ、実は俺も詳しいことは知らないんだ」
「久遠さんってすごく人脈広いじゃない。
刻泉学園や槇喜屋の偉い人たちと知り合いだったり、
だからといって、お高くとまってるわけでもなくて、
地元の方々とも知り合いで、
いろいろ買い物とかでおまけしてもらったり。
それから前に美奈子先生に聞いたのだけど、
美奈子先生の人生最大の危機を救ったみたいだよ」
「へぇ！そうだったのか」
「そこでさっきの探偵の話に戻るのだけれど、
久遠さんの秘密を探ってみるというのはどうかな？」
「う～ん、でもなぁ。
あまりそういうのは気が乗らないんだが・・・
それに具体的に何をするんだ？」
「それは・・・
と、とりあえず尾行とか・・・？」
はるかもそこまでは考えていなかったらしく、
少し言い淀む。
「尾行ねぇ」
「と、とにかく！
とりあえずやってみようよ！」

はるかに押し切られる形で、
俺も付き合う事になったのだった。

「じゃあ私ちょっと出かけて来るわね。
翔ちゃん達も出かけるなら鍵締めよろしくね」
「ああ」
「は～い」
母さんはそう言うと出かけていった。
「さあパパ、始めるよ！」
「はぁ、わかったよ」
俺は溜息をつく。
「パパ、溜息をつくと幸せが逃げて行くんだよ？」
はるかがどこかで聞いたような事を言う。
「ほら、久遠さん行っちゃうよ！」
「わかった、わかったから」
はるかに手を引かれて俺達は母さんの尾行を開始した。

母さんはまず商店街に入って行った。
馴染みの店なのか、店員さんと談笑をしている。
その様子を俺たちは柱の影から見つめているのだが・・・・
はるかの手にはソフトクリームがある。
それは・・・

5分前。
「パパ～暑い～」
「夏だから当たり前だな」
「なんか冷たいものが食べたくない？
ほら、あそこでソフトクリーム売ってるよ」
「母さんを見失うぞ」
「あたしが見ているから大丈夫だよ」

そんな会話を俺達はしていた。

「パパも一口食べる？」
はるかが手に持ったソフトクリームを笑顔で差し出してくる。
結局俺ははるかの、
こういう時は男の人がカイショーを見せる所なんじゃない？
という言葉に言い負かされて奢らされてしまったのだった。
「いや、俺はいいよ。自分のがあるし」
俺はその誘いを断る。
「もう遠慮しなくていいのに～
あ、もしかして間接キスを気にしているとか？」
「・・・」
はるかに図星をつかれて俺は黙る。
「もう、パパってばうぶだなぁ。
でもそんなかわいいパパも大好きだよ♪」
「・・・まあそれもあるけど。
でもな俺にはもう彼女がいるのだから、
そういう事は娘ととでも安易にしたくないんだ。
それが一番の理由だな」
俺がそう言うと、
はるかは今度は感心したのか、
少し驚いた顔になった。
そして笑顔になる。
「うん。
それでこそあたしのパパだよ！」
「そんなことより母さん店出たぞ」
「あ、大変！」
そんな様子で俺達は尾行を続けていたのだった。

母さんはその後もしばらく買い物を続けていたが、

唐突に携帯を取り出した。
誰からか電話がかかってきたみたいだ。
「パパ、久遠さんが何か話しているよ」
「でもここからだと聞こえないな・・・」
「集音マイクとかないの？」
「そんなものあるわけないだろ」
そんな事を言い合っていると、通話が終わったのか、
母さんは携帯をポケットに入れて駅の方に歩き始めた。
俺たちもそれを追って駅に向かった。
電車にしばらく乗っていると、かなりの田舎についた。
母さんは電車を降り、改札から外に出る。
そして駅から少し歩くと、森があった。
そしてそこには獣道と思われる道がある。
母さんはそこに入っていく。
俺達は黙ってついていった。
しばらく歩くと森を抜けた。
唐突の日の光に俺は目が眩んだ。
俺は目を細める。
そして俺はその景色を目の当たりにしたのだった。
一面にひまわりが咲いていた。
こんなにたくさんのひまわりを俺は見たことがなかった。
「凄い・・・」
はるかもその景色に圧倒されているようだ。
「いいところでしょう？」
唐突に母さんが呟いた。
俺たちは自分達の目的を完全に忘れて、
母さんのすぐ近くまで来ていたのだ。
「すぐ近くにいるのに、いつまで経っても話しかけてこないから、
私から話しかけちゃった」
「・・・気付いてた？」

「え？隠れてるつもりだったの？」
「・・・いつから気が付いてた？」
「商店街にいる時よ」
「最初からか・・・」
俺はうなだれる。
俺たちが尾行していたことは最初から母さんにバレていたようだ。
「それで何をしてたの？
探偵ゴッコ？」
「・・・そんなところ」
「なぁ～んだ～
母さんも混ぜてくれればよかったのに～
あ、でもある意味混じってるわね。
そっか、そっか～翔ちゃん達近くにいるのに、
なんかコソコソしてるし、全然話しかけてこないと思ったら、
そういうことだったの～
でもなんでそんな事してたの？」
「それは・・・」
俺が言いかけた時に、
今まで黙っていたはるかが頭を下げた。
「久遠さん、つけるような事してごめんなさい！」
「はるかちゃん？」
「あたし久遠さんみたいになりたくて・・・
でもあたし久遠さんの事、何も知らなくて・・・
それで久遠さんを追いかければ少しは何かわかるかなと思ったの・・・
・
パパはそんなあたしに付き合ってくれて・・・」
「え、ちょっと。
別に怒ってなんていないからはるかちゃんも頭をあげてよ」
母さんがそう言うとはるかは頭をゆっくりとあげた。
「でもなるほどね。

これで謎が解けたわ」
母さんはそう言うとひまわりの方を向く。
「ここはね私が初めてデートに連れてきてもらった場所なの」
母さんは話しだす。
「本当はあの人も来る予定だったのだけれど、
さっき電話があってやっぱりどうしても帰ってこれないみたいでね。

それなら翔ちゃん達を案内すればいいかなと思って来たのよ」
「俺達は見事に誘導されたってわけか」
「でも来てよかったでしょう？」
「ああ。
でも俺達を案内しちゃってよかったのか？」
「別に独り占めしたいわけじゃないもの。
こんな光景、今じゃ殆ど見れないし、
はるかちゃんの時代じゃ余計見れないんじゃないかと思って。
せっかくはるかちゃんがこの時代に来ているんだから、
なかなか見れない物を見せてあげたいじゃない」
「久遠さん・・・」
はるかは母さんの言葉に感動しているみたいだ。
「さあ、一緒にひまわりを眺めましょう」
母さんの言葉通り、俺達は一面のひまわりをしばらく眺めていた。

「ただ今～」
俺達は家に帰って来た。
「おかえりなさ～い」
澄香の声が帰ってくる。
澄香達は俺達が出掛ける前に出掛けていたが、
どうやら先に帰ってきていたみたいだ。
「翔ちゃ～んお腹すいた～」
陽奈の声も続いて響いてくる。

もうそろそろ夕飯の準備に取り掛からなければいけない時間になっていたので、
俺は早速準備にとりかかる。
こうして俺達の初めての尾行作戦は幕を閉じたのだった。

「はるかちゃん」
夕食の後にあたしは久遠さんに呼ばれた。
「ちょっとお話しない？」
あたしは頷いた。
あたしは久遠さんの部屋に招かれた。
この部屋に入るのは初めてだった。
「はるかちゃんはさっき私みたいになりたいって言ってたわよね」
「うん」
「どうして？」
「だって久遠さんは何でもできて・・・
できない事なんてないみたいで・・・
それにお友達もいっぱいいるし・・・
あたし、そんな久遠さんに憧れているの」
久遠さんは一呼吸置く。
「そう、はるかちゃんは私の事をそう思ってくれていたのね。
はるかちゃんにそう思ってもらえてとても嬉しいわ。
でもねはるかちゃんにはあまり私みたいになってもらいたくないかな。
私には私の、
はるかちゃんにははるかちゃんのそれぞれの生き方っていうのがあるでしょ？
それに私ははるかちゃんが思っているほど、完璧な人間じゃないわ。
私はねちょっと力を使いすぎちゃってね。
それでいろいろあってあまり人には言えない世界を見てきたし、

経験もしているわ。
残念な事だけど世界は綺麗事ばかりじゃないわ。
これははるかちゃんの時代でも言えるはずよ。
でもねできれば私の子供や孫にはそういう世界に関わってほしくない。
みんなにはのびのびと生きて欲しい。
でも私みたいに生きていたら、いつか誰かに気づかれちゃう。
だから私みたくなってもらいたくないの」
「そう・・・だったのですか・・・」
「憧れてくれたのは本当に嬉しいけどね」
「わかりました。
私ももう少しいろいろ考えてみます。
この超能力の使い方やこれからの生き方を・・・」
「そうね。
はるかちゃんが幸せになってくれるのを願っているわ」
「ありがとう、久遠さん」
「うん」
久遠さんは笑ってくれた。
「久遠さん、もう一つ質問してもいい？」
「何かしら？」
「いい女ってどうすればなれると思う？」
「・・・そうね。
誰にも知られてない秘密を持っている人、
そういう女の人は素敵だと思うわ。
女の魅力ってそういう事だと私は思う。
よく言うじゃない？
女は秘密を着飾って美しくなるって。
あんな話をした後じゃ説得力ないけどね」
久遠さんは苦笑する。
「ううん、そんなことないと思う。

あたしも自分だけの秘密を作れるようがんばる！」
「それがいいと思うわ」
「久遠さん改めていろいろお話してくれてありがとう」
「私でよければいつでも相談に乗るからね」
「うん！それじゃあね久遠さん」
そう言うとあたしは久遠さんの部屋から退室した。

私ははるかちゃんが退室したのを確認した後、机に座る。
そこには若い頃の私と最愛の人と写真が飾ってある。
頬杖をつきながらその写真に私は問いかける。
「ねぇ？私と結婚してあなたは幸せ？」
返答が返ってくるわけでもないのに、
私はそんな質問をしてしまった。
その瞬間携帯電話が鳴った。
私は少し驚き、携帯電話の画面を確認する。
相手は写真の人だった。
私は電話にでる。
「もしもし？」
「久遠、今日はすまなかった。
この埋め合わせは必ずする」
「本当よ～
楽しみにしていたんだからぁ。
なぁんてね。
今日はね翔ちゃんとはるかちゃんとあの場所に行ってきたの。
二人ともとても気に入ってくれてたわ」
「ああ、翔太郎の娘が来ているんだったな。
うちらから見れば孫娘か。
こないだ写メを見たがとてもかわいい子だったな。
そうか、あの二人も気に入ってくれたか」
「ええ」

「それはよかった。
俺も行ければよかったのだけどな。
まだ少し今の仕事が片付くのに時間がかかりそうだ・・・」
「そう、お疲れ様」
私はここで一呼吸おく。
「ねぇ、一つ聞いていい？」
「ああ」
「私と結婚してあなたは幸せ？」
「・・・何かあったのか？」
「ううん、深い意味はないの。
ただはるかちゃんが私のようになりたいって言ってたのよ。
それでちょっと気になっちゃってね。
私の超能力のせいであなたにも迷惑をかけたことあるでしょ？」
「そうだな。
だがあの時も言ったろ。
そんな事気にしないって。
俺はそういうことも含めて久遠の全てが好きなんだって。
そしてそれは未来永劫変わらないって」
「・・・そうね。
あなたはそう言って私を受け入れてくれたのよね。
ごめん変な事きいて。
もう大丈夫だから」
「ああ。
むしろ俺の方こそ翔太郎達を任せきりにしてしまってすまん。
何か困った事があったら連絡くれ。
まあ久遠が困る事を俺が解決できるかわからないが、
愚痴くらいなら付き合えるからさ」
「ありがとう。
私、やっぱりあなたと結婚できてよかった。
愛しているわ」

「俺も愛しているよ久遠」
「それじゃあ私もちょっと仕事しなくちゃいけないから」
「ああ、それじゃあまたな」
会話が終わり私は電話を切る。
さっきまでの不安は綺麗さっぱりなくなっていた。
「まさに超能力ね。私限定だけど」
自分で言っておかしくて笑ってしまう。
「さあ、それじゃあ頑張ってお仕事しますか！」
私はパソコンの電源を入れた。

Ｆｉｎ

メリクリメリクリ！
「うるさいよ」
あ、ども遊び人レベル世界3位です。
「無視するな」
はいはい。機嫌悪いねぇ
「クリスマスくらいゆっくりさせてよ」
まあ来年は大丈夫・・・なんじゃない？
「だといいけどね。
ともかくいつもの反省やるよ」
ほいほい。
今回の反省点は文章的なところかな。
結構読み返してみたら変更したいところが結構あった。
細かいところでね。
やっぱり読み返しは必要かなぁと。
まあ本にした後にそんな事思ってもしょうがないんだけど。
「もうどうしようもないもんね」
ああ。

だってもう手元にサンプルあるもん。
誤字はもはや仕方ないとはいえ、
セリフとか表現の仕方を変えた方がよかったってのが、
結構あったし。
「まあ今後気を付けていくしかないんじゃない？
余裕もったスケジュール組んで作るしかないっしょ」
そうなんだけどそれができれば苦労しないって。
まあできる限りの事はやるけどさ。
「それじゃあ次背景」
今回の背景はＷｉｔｈ　Ｒｉｂｂｏｎの謎の一つ、
久遠さんは何者？って事に焦点を充てるつもりだったのだけど、
同人誌の締切の都合と、
今後なにか展開があればその辺は公式で触れるんじゃないかって思って、
今回は久遠が自分の想い出の場所に二人を連れていくって話にしたんだ。
「後は何かある？」
後は今回も先月に引き続き、
主人公視点を中心に書いてみたんだけど、
今回はどうだったかなぁと。
来年はちょっと主人公視点のＳＳを多く書いていきたいと思ってるんだよね。
だからその慣らしにもなったかなって。
それくらいかな。
「そう。
じゃあ閉めるよ」
ここまで読んでくださった皆様ありがとうございました。
今年は後一本、
ぶらばん！のみなせの連載ＳＳの完成版を公開予定ですのでまたよろしければ、

またお付き合い下さい。
「まだあんの～」
そりゃあね。
コミケの2日目に公開できるよう頑張ってるよ。
ああ、後、来年の正月もあるからよろしく。
「はぁ、はいはい。
じゃあボクはこれで失礼するよ」
ここまで読んでくださった方改めてありがとうございます。
また次のＳＳもお付き合いいただければ幸いです。
それでは～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8011z/

日向久遠誕生日記念SS

2011年12月25日18時49分発行